

新型コロナウイルス感染症の猛威が国内外で続いています。しかし、ウイルスは感染症だけではなく、がんの発症原因にもなります。

ウイルス感染が発がんをもたらす代表が肝臓がん、このがんの原因の約8割が「肝炎ウイルス」によるものです。肝臓の炎症の原因となるウイルスにはいくつ種類がありますが、肝臓がんの原因となるのはB型、C型の肝炎ウイルスです。

日本におけるB型肝炎ウイルスの保有者（キャリア）は約150万人といわれています。そのうち10%程度が肝炎を発症し、さらに一部が、慢性肝炎から、肝硬変、肝細胞がんに進行します。日本の肝

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

ウイルスがんの発症原因にも

だ結果、新規の感染はめずらしくなり、C型肝炎による発がんは減少に転じています。

一方、B型肝炎ウイルスによる発がんは減少していません。B型肝炎ウイルスはC型より感染力がはるかに強いため、輸血の他、母親から胎児への「母子感染」や注射器の使い回し、入れ墨、性行為など、さまざまな感染ルートを通

臓がんの約15%はB型肝炎ウイルスが原因だとされます。肝臓がんの原因の65%程度を占めるのがC型肝炎ウイルスの感染です。B型、C型肝炎

感染しますが、C型はB型よりずっと感染力が弱く、大量の血液が体内に入る輸血や血液製剤の投与が主なルートです。そして、輸血用血液など

持っています。また、コロナウイルスと同様、感染経路が特定できないケースも少なくありません。

ウイルスとともに血液を介して

からのウイルスの除去が進ん

C型肝炎ウイルスにはワクチンがありませんが、B型肝炎

炎ウイルスについては、ワクチンを子供の頃に接種しておけば、ほぼ100%抗体ができ、感染を予防できます。多くの先進国ではワクチン接種が常識となっており、米国では接種していないと小学校への入学が認められません。「ワクチン後進国」の日本でも2016年10月から、B型肝炎ワクチンの定期接種が始まりました。

肝炎ウイルスへの予防が進んだ結果、肝臓がんによる死亡率は10年で半分近くに減っています。しかし、ヒトパピローマウイルスの感染が発がん原因のほぼ100%を占める子宮頸(けい)がんの死亡率が上昇しており、大きな問題です。(東京大病院准教授)